

ベルリンのカフェにて ——「バウエル茶店」と鷗外

美留町 義雄

MORI Ōgai in Café Bauer

Yoshio BIRUMACHI

序

一八七七年一〇月十三日、ベルリンの伝統紙「フォス新聞」に次のような広告が掲載された。

この紙上で敬愛する皆様方にお知らせいたします。本日、午後四時、手前どもの新しいウィーン風カフェが、ウンター・デン・リンデン通り二十六にオープンします。どうかご愛顧賜りますよう心よりお願い申し上げます。

M・バウアー 敬白

「新しいウィーン風カフェ」の支配人であるマティーアス・バウアーは、すでにウィーン市内のプラター公園にカフェ・ハウスを所有していた。この公園では、去る一八七三年、ウィーン万国博が開催され、そしてこの博覧会をきっかけに、ベルリンでウィーン風カフェが流行することとなる。「ウンター・デン・リンデン通り二十六」、すなわち目抜き通りの中心部で店を構えたカフェ・バウアーは、ベルリンで林立し始めたそのようなウィーン風喫茶店の、いわば代表格であった。⁽¹⁾

ベルリンにあったそれまでの喫茶店は、コンディトライ (Konditorei) と呼ばれるものであった。平たくいえばこれは町のケーキ屋であり、



図版1 カフェ・パウアーの内部

買ったケーキを店内で食べるための席が設けられてあるに過ぎず、その際にコーヒーやココアなどが飲まれたのである。⁽²⁾しかし、「新しいウィーン風」は違った。カフェ・パウアーとはどういう場であったのか、図版一を見てみよう。

これは開店の翌年、一八七八年に画家F・シュタールによって描かれた店内の様子である。まず目を引くのはその絢爛豪華な内装である。広々としたホール、装飾が施された円柱の列、まばゆいシャンデリア、大きな壁面に描かれた一流の絵画、せり出すモダンな^{ギャラリ}な敷席、——客は、コーヒー一杯を注文するだけで、このような華美な場に席を占め、長時間でも憩うことができた。ゆえに、開店当初から評判を呼んだこの店には、実に多くの人々でこった返すことになる。

その多彩な客層は、図版からうかがい知ることができる。まず左下のテーブルには、軍服姿の人物と同伴の女性が腰をかけている。カイゼル髭をたくわえたこの軍人の姿は、強国プロイセンの威勢を伝える典型的な像でもある。だが一方で、その隣席には、着飾った二人の婦人が座しており、ダンディー風の男と和やかに話を交わしている。帝都ベルリンは、パリ・モードに身を包んだ淑女や、洒落た紳士がそろそろ歩く文化都市でもあったのだ。

ちなみに、都市の雰囲気やを体現するこうした人物たちを、森鷗外もほぼ同様に描写している。『舞姫』の主人公、太田豊太郎の目をまず奪うのは、カイゼルの都ベルリンを象徴するような「胸張り肩聳えたる士官」であった。そして感嘆する彼の視線は、今度は華やかな女性、すなわち「巴里まねびの粧したる」^{よそおい}「妍き少女」^{かおよ}に向けられる。

さらに作中には、「レエベマン」、いわばカフェに菓食・道楽者も登場するのである。まるで図版の人物像をなぞっているような鷗外の筆致は、当時のベルリンの人間像をかなりの確に写し出していたというべきだろう。⁽³⁾

さて、バウアーを訪れたのは、こうした紳士淑女だけではない。図版の右下には母親に連れられた子供の姿も見え、この他に一般の市民も多数訪れていた。そして右下でトレーを持って立っているのは、ウェイターである。多くの常連客の顔を憶え、店が混雑しても自在に店内を移動し、どこからか席を融通して巧みに客を誘導するその手腕は、多くの人々が賞賛するところだった。

さて、そんな中で、一人の人物に注目したい。それは子供の真上に描かれた、弁髪姿のアジア人である。実際に、たちまちベルリンの名所となったバウアーは、多くの外国人が訪れる観光スポットでもあったのだ。当時の旅行ガイド『ベーデカ』の「カフェ・コンディトライ」の欄を見れば、その筆頭にバウアーが挙げられており、「きわめてエレガント」と紹介されている。⁽⁴⁾そして留学生森鷗外もまた、この喫茶店に足繁く通った外国人の一人だった。彼の『独逸日記』、明治十八年五月二十九日の記述を見てみよう。

三浦の家にありて日を消す。夜バウエル茶店 Café Bauer に至る。三浦、加藤の球戯を作^なすを觀る。⁽⁵⁾

これを皮切りに、彼の日記にはバウアーをはじめとするベルリンのカフェが頻繁に登場する。ちなみに、この引用で鷗外が記すとおり、バウアーには「球戯」、すなわちビリヤード場が、図版の上部、二階席の奥に設けられていた。夜半、二階席にまで自由に出入りし、球戯に興じる鷗外の友人たちは、相当この喫茶店に馴染んでいたといっていだろう。図版に描かれた弁髪の男は、明らかに中華風であるが、当時は日本人も中国人も同じ眼で見られていただけに、バウアーを頻繁に利用するそうした東洋人たちの一例として、画家の目にとまり、写し出されたのかもしれない。

カフェ・バウアーは、決して単なる街中の喫茶店ではない。絢爛たる店内に国籍や階層を越えた雑多な人間がひしめき合い、こちらのテーブルで国政を論じる声が聞こえるかと思えば、あちらでは芸術談義に花が咲き、ビジネス・チャンスをつかもうと躍起になっている者がいれば、派手に着飾って男達に色目を使う娼婦もいる、いわば、発展途上の混淆状態にあるベルリンをそのまま写し出す鏡であった。鷗外たち留学生がそこに足繁く通ったのも、単なる観光ではなく、帝都の雰囲気凝縮したかたちで感じ取れる



図版2 繁華な十字路に面したバウアーの外観

「パウエル茶店」の魅力があったからだろう。本論は、このカフェ・パウアーに焦点を当て、当時の喫茶店や来客たちの模様をできるだけ再現し、その歴史・文化的意味を考察する試みである。また、同時にその作業は、ドイツ滞在時の鷗外をその周縁から浮き彫りにすることになるだろう。

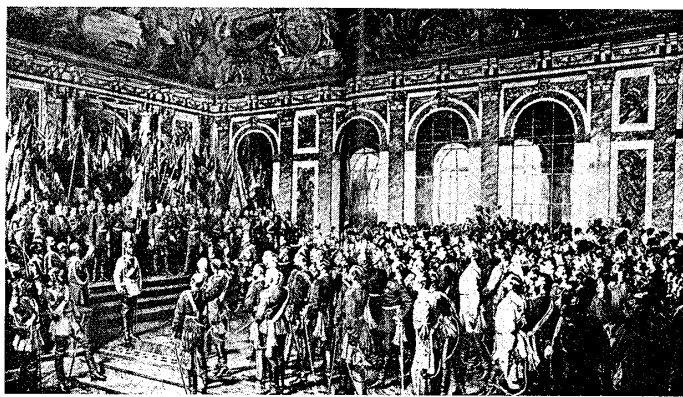
一

先に豪華絢爛たるパウアーの内装について触れたが、その中でとりわけ客の目を奪ったのは、壁一面に広がる大きさに描かれた、プロイセンを代表する歴史画家アントーン・フォン・ヴェルナーによる絵画であった。ヴェルナーは、皇帝^{カイザー}を抱えの宮廷画家であり、普仏戦争終結の際の、ヴェルサイユ宮殿鏡の間におけるドイツ皇帝即位式のシーンを描いた芸術家として知られている。⁽⁶⁾ 図版三に挙げられたその画には、宿敵フランスを破ったヴィルヘルム一世が、貴族将校達の歓呼の中で戴冠し、ついに長年の悲願であったドイツ統一が達成した光景が描かれている。カフェ・パウアー開店と同年の三月二十二日、つまり、皇帝の八十歳の記念に献上されたこの絵は、カイザー率いるドイツ帝国の繁栄を象徴する、まさに歴史的モニュメントに他ならなかった。



図版4 「凱旋塔」の様子。ヴェルナーの絵は円柱で囲まれた部分にある。

皇帝と帝国の輝かしい勝利をテーマとしたヴェルナーは、当時、ベルリン・アカデミーの頂点に君臨していた画家であると同時に、軍事大国ドイツの威風を喧伝するメディアでもあったのである。そうした意味を持つ彼の作品は、この時代のベルリンのいたる所で見られることができた。例えば、議事堂の前にそびえる歴戦の勝利を記念する塔、ジーゲスゾイレの基部には、帝国樹立の経緯を象徴的に描いた彼のモザイク画があった。『独逸日記』を見ると、鷗外はベルリンで生活を始めた直後、名にし負うこの「凱旋塔」に赴いている。鷗外は、塔から四方を眺めた印象を書き記しているが、階段を上る前にヴェルナーの装飾画を目にして、その場に漂う愛国的な雰囲気を感じたはずである。また、『舞姫』の舞台となった鷗外の旧市街の下宿にほど近



図版3 ヴェルナーの代表作「ドイツ皇帝即位式」



図版5 左より「饗宴」「舞踏」「浴場」「夕べの憩い」。なお、原画はすべて戦災で失われ、これらは当時の絵葉書に描かれたもの。

く、アレクサンダー広場駅のすぐ隣にあったパノラマ館には、セダンの戦いを描いたヴェルナーの壮大なパノラマ画が公開されていた。普仏戦争の決戦の光景から、ナポレオン三世の降伏の様子まで、臨場感溢れる演出で再現されたこのパノラマは、大いに評判を呼び、ベルリンの名所となっていたのである。

しかし、そんなヴェルナーの画風を知る市民は、バウアー店内に入ってその印象のあまりの違いに驚くこととなった。「ローマの生活」と銘打たれたその連作絵画は、これまでのモチーフとは全く異なり、豊かで平和な古代ローマの生を、精緻なタッチで描写したものだだったのである。実際にその画を見てみよう。「饗宴」と題された一枚目の絵は、寝椅子に横たわり、和やかに歓談する人々のもとに、豪華な食事が運び込まれる情景が描かれている。次の「舞踏」は、右下の楽人たちの演奏に合わせて踊る舞踏の様子と、寝そべりながら酌を受け、その舞いを見る貴人たちの姿を描写したものである。続いて「浴場」では、ローマ風の浴室の中、若者たちの力比べの模様とたくましい彼らの肉体美が、そして最後の「夕べの憩い」では、琴の調べと歌声に耳を傾け物思いにふける人々——右上の二人は睦まじく愛を語る恋人同士であろうか——が描かれていた。

軍国色に満ちたベルリンの中心部にあるカフェの中に、このような異国の優雅な生活が再現されること、これは来客たちを驚かせるに足る思いがけない演出だった。店内にはこの他に、風景・建築画の名手クリスティアン・ヴィルベルクによる六枚の大作、「ローマの風景」が飾られていた。ローマの宮殿や庭園の眺めが、南国風の背景の中に広がるこの絵も、この喫茶店をエキゾチックに演出する効果を上げていた。しかし、大家ヴェルナーは、並んで掛けられた自身の具象的な人物画と、ヴィルベルクの理想化された風景画に不調和を感じていた。それゆえ、一八八二年、後者がパリで客死した後、これらの風景画は外され、新たにヴェルナーによって描かれた「朝」から「夕暮れ」までの六枚の連作画、「ローマの一日」がその場を占めることになる。つまり、鷗外が見たバウアー店内の壁は、ヴェルナーによる古代ローマの生活風景で統一されていたのである。⁽⁷⁾

ヴェルナーは、この仕事に関して、後に「冒険」であったと回想している。彼の意図は、「日常生活の過去と現在についての省察に誘うような光景」を描くことにあった。⁽⁸⁾ こうした彼の思惑通り、来客たち

は、いにしえの生活の様子に魅了されただけではなく、それをベルリンにおける自身の生と対比させたのである。寝椅子に身を横たえながら優雅に飲食し、踊りや音楽に興じる古代のローマ人たちの様子は、大都会の雑踏と喧噪の中で分刻みのあわただしい生活を送る現代人のライフ・スタイルを、強烈かつ皮肉に逆照射したに違いない。来客たちは、こうした不思議なコントラストの中に身を置き、忙中の憩いを求めたのである。

日常生活の対岸にある古代イタリアの情景、それは鷗外にとってまた違う重要な意味合いを持っていただろう。というのも、この頃の彼は、軍医官としての公務の傍ら、西洋文学、特にゲーテの著作に没頭していたからである。留学後一年足らずで「已に百七十余巻の多きに至」った彼の蔵書には、ソフォクレス、エウリピデス、アイスキュロスといった古典ギリシャの詩人やダンテの『神曲』等と並んで、「宏壮にして偉大」なゲーテの全集があった。この時期に、鷗外が集中的にゲーテを研究したことは、彼がゲーテの『ファウスト』翻訳を構想しており、劇場での公演を観に行ったりしていることから分かる。そしてまさにゲーテとその文学こそが、ゲルマン人の内面に潜む地中海世界への憧憬を、典型的かつ決定的に表すものであった。

一七八六年九月三日払暁、ワイマル公国の高官であったゲーテは、密かに滞在中のカールスバートンを抜け出し、道中偽名を用いてアルプスを越え、一路、イタリアの地を目指した。十年あまりの官僚生活や複雑な人間関係に疲弊し、息も絶え絶えの状態であった詩人ゲーテは、「第二の誕生」を果たすべく、かねてより憧れていたローマへ旅立ったのである。陽光燦々たる気候、あまたの遺跡や美術品、心惹かれる南国の風景、そして美しい女性たち——ゲーテの『イタリア紀行』は、これら異国の風物が、北国からの旅人を優しく癒し、乾きかけていた詩人の魂を再生させた喜びに充ち満ちている。

鷗外は、まさにベルリン滞在時に、ゲーテのこの紀行文を読んでいた。ところどころに記された書き込みを見ると、かなり熱心にこの書に打ち込んでいたことが分かる。⁽⁹⁾しかし、南仏マルセイユからヨーロッパに上陸した鷗外は、イタリアに足を踏み入れたことがなく、かの地に関する知識も乏しかった。そんな彼にとって、バウアー店内の、一流の画家によって再現されたローマの風景は、ゲーテのイタリア体験を理解する格好の材料となったに違いない。青々と茂る南国の植物、新鮮な果実や食物、心浮き立たせる歌や踊り、快活で健やかなイタリア人の姿など、壁画に描かれたこれらのモチーフはみな、『イタリア紀行』の随所に見られるものだ。「一盞の咖啡」を前にした鷗外が、ヴェルナーの絵を間近に眺めながら、ゲーテが欲した「ローマの生活」を追体験したことは、十分に考えられるのである。

さらに、この絵を見つめる鷗外の脳裏には、もう一つの文学作品があったろう。それは、留学中鷗外がレクラム版のドイツ語で読み、帰国後九年の歳月をかけて翻訳した、アンデルセンの『即興詩人』である。⁽¹⁰⁾「我座右を離れざる書の一に属す」と述べるまでに愛読したこの小説は、翻訳家としての鷗外の文名を一気に高めるきっかけとなった。北欧デンマーク生まれのアンデルセンは、ゲーテ同様に、故国から逃げるように旅立

ち、憧れのイタリアに赴く。そしてかの地で、一人のローマ少年を主人公に、『即興詩人』を執筆し始めた。その波乱に富んだ発展小説は、場所をイタリアに移し換えた、アンデルセンの半ば自伝といってよい。後に出世作となるこの物語に、アンデルセンは北国からの旅人を登場させ、イタリアへの熱い思いを代弁させている。その箇所を、鷗外は文語体にて次のように訳している。

げに伊太利はめでたき国なる哉。北方の故郷に在りし間、常に我懷に往来せしものはこの景なり、この情なり。嘗て夢裡に吞みつる霞は、今うつゝに吸ふ霞なり。故郷の牧を望みては、此橄欖の林を思ひ、故郷の林檎を見ては、此柑子を思ひき。されど北海の緑なる波は、終に地中海の水の藍碧なるに似ず、北国の低き空は、終に伊太利の天の光彩あるに似ざりき。⁽¹¹⁾

なお鷗外はドイツ語版の『即興詩人』をテキストとしている。ここで参考に、原語を翻訳した大畑末吉による現代語訳も挙げておこう。

「うるわしのイタリアよ! (･･) はるかな北の国にいて、いつもぼくのまぶたにうかぶのはおんみのすがただった。今ここでそよ風ごとに吸いこむこの香気は、ぼくの思い出のなかにも吹いていた。故国のやなぎを見るたびに、おんみのオリーブの森を思い、クロバーのかおる野なかの百姓家の庭に実のる黄金のりんごを見ると、夢路にかようのは、いつもこの豊かなオレンジだった。だが、緑なすバルト海は、けつして美しい地中海のように青くはない。北の国の空は、あたたかい明かるい南欧の空のように、高くも、あざやかな色に富むこともない。」⁽¹²⁾

風薫り、紺碧の空のもと、オリーブやオレンジがたわわに実るイメージ、そして「うるわしのイタリア」に寄せる高揚した気持ち、これは先のゲーテとまったく同質のものだ。アンデルセン自身、『イタリア紀行』を愛読し、高く評価していたことを考えれば、パウアーに座していた頃の鷗外は、ゲーテから由来する北方人たちのイタリア憧憬に、色濃く包まれていたことになる。自身も官僚である鷗外は、官職から身を振りほどき、再生を期して異国へ旅立ったゲーテの境遇に対して、特別な感慨を抱いたに違いない。その思いがまだ覚めやらぬうちに、鷗外は『舞姫』を書いた。彼の半ば自伝ともいえるこの作品も、国家のため「器械的」に働いていた主人公が、異国の地で「まことの我」に目覚め、すべてを捨ててエリスとの愛に生きようとした（そして失敗した）物語であった。

そもそも、くだんの絵を描いたヴェルナー自身も、かつてイタリアへ向けて旅立った一人であったのだ。陰鬱な北ヨーロッパと異なり、色も形



図版6 「カフェ・パウアーの読書室にて」(1887年)

象も、すべてが「あざやか」な世界であるイタリアは、文筆家だけにとどまらず、多くの画家が目指した聖地でもあった。概してヴェルナーはかの国に寄せる感動が薄く、その滞在が彼の芸術に及ぼした影響も顕著ではないと評されている。⁽¹³⁾しかし、パウアーの壁絵の依頼が来たとき、それでも一度は、かつて見た鮮烈なイタリアの自然と人間を表さずにはいられなかったのだ。晴朗な色調で描かれたその絵は、軍国色に塗りつぶされたヴェルナーのキャリアにおいても、まるで「あたたかい明かるい南欧の空のよう」な異色の出来となったのである。

二

鷗外が頻繁にパウアーに通った背景には、これまで述べられたことからの他に、あるプラクティカルな理由があった。一八八六年(明治十九年)八月十一日付の『独逸日記』に、彼は「午餐後パウエル骨喜店 Café Bauer に至り、日々新聞を読む」と記している。カフェ・パウアーを何よりも有名たらしめたのは、その豪華なウィーン風のスタイルはもとより、来客の閲覧用に供された新聞・雑誌類の豊富さであった。ドイツ国内はもちろん、他のヨーロッパ諸国や、アメリカ、アジア、アフリカ、オーストラリアなど、文字どおり世界中から新聞が取り寄せられ、日本のものでは東京「日々新聞」を読むことができたのである。

これに関して、一枚の興味深い図版がある。図版六は、パウアーが取り寄せている各紙とその読者を戯画的に描いたものである。中央に位置する、新聞をいくつも抱え込んだ男には、「新聞漁り」とタイトルがつけられている。精力的にニュースを追いつめるあまり、マナーを顧みずに何紙も独り占めする客は必ず存在し、そのような者がかち合うと、新聞の争奪戦が繰り広げられるのであった。その左に座す婦人は、「フィガロ」を読んでいる。仏紙をお好みだけあって、大きな扇と派手な帽子、コルセットで引き締めたバスル・スタイルで、パリ風に装っている。そして「新聞漁り」の下には、犬を連れ、帽子からズボンまでチェック柄で身を固めた男がいる。果たして彼は英国人で、読んでいる新聞は「タイムズ」なのである。さらに、図の左下、ラフないでたちでパイプをくゆらすのは、米国人であり、手にして

いるのは「ニューヨーク・ヘラルド」紙というわけだ。

さて、その米国人の上には弁髪べんぱつの男がいる。彼が読んでいるのが「Tokio Nichi-Nichi Shinbun」(東京日々新聞)なのである。つまりここでも、日本人は中華風に誤解されている。パウアーの新聞・雑誌リスト(一八八九年)を参照すると、各国から取り寄せられている新聞は、全部で三四八を数えている。⁽¹⁴⁾ そのうちアジアからの新聞は、日々新聞の他は、英領シンガポールの英字紙のみであった。これは、留学生をはじめとして、当時のベルリンでいかに日本の新聞の需要があったかを示している。ちなみに、明治末期にベルリンを訪れた片山孤村は、ベルリンのカフェと新聞について、次のように紹介している。

伯林の生活程度から云へばカフェーほど廉価に休養と娯楽とを与へる場所は無い。又大抵世界各国の新聞雑誌が備付けてあるので、これほど天下の形勢を知るに便利なところは無い。風俗や民情を視察せむとする旅行者や外国人は必ずカフェーを訪ふ可きである。⁽¹⁵⁾

鷗外やその他の日本人、いや、そこを訪れるすべての「旅行者や外国人」にとつて、カフェ・パウアーは、ただ「廉価に休養と娯楽とを与へる場所」ではなかった。世界中の新聞雑誌が揃えられ、多数の外国人が集まるその喫茶店は、「天下の形勢」、すなわち、遠い祖国の消息や世界中のニュースを知ることができる、いわば貴重な情報センターでもあったのだ。⁽¹⁶⁾

パウアーには、こうした新聞類の他に、各分野の専門誌も備え付けてあった。例えば、建築、金融や商工業などの業界誌があり、鷗外の関心のあるところでは、「ドイツ医事週報」などの医学誌も取り揃えられていた。これらの新聞・雑誌の数は六百を超えるといわれ、二階に設けられた閲覧室には、常時三人の司書役が働いていたのである。「情報センター」というのは決して大仰な表現ではなかった。

このようなカフェの機能は、留学生鷗外に強い印象を与えたに違いない。彼は『舞姫』にて、「休息所」における一シーンを描いている。次に挙げたその様子は、限りなくベルリンのカフェの実景に近い。

朝のカフェへ果つれば、彼は温習に往き、さらぬ日には家に留まりて、余はキヨオニヒ街の間口せまく奥行のみいと長き休息所に赴き、あらゆる新聞を読み、鉛筆取り出で、彼此と材料を集む。^{かれこれ}この截り開きたる引窓より光を取れる室にて、定りたる業なき若人、多くもあらぬ金を人に借して己れは遊び暮す老人、取引所の業の隙を偷みて足を休むる商人などと臂を並べ、冷なる石卓の上にて、忙はしげに筆を走らせ、小をんなが持て来る一盞の咖啡の冷むるをも顧みず、明きたる新聞の細長き板ぎれに挿みたるを、幾種となく掛け聯ねたるか

たえの壁に、いく度となく往来する日本人を、知らぬ人は何とか見けん。

この時、主人公太田豊太郎は、エリスとの事が問題とされて職を解かれ、「某新聞社」の通信員として働いていた。そんな彼がニュースを求めて通ったのが、この場末のカフェとおぼしき「休息所」だったのである。彼は、コーヒ一杯を注文するのみで、先の新聞漁りよろしく代わる代わる「あらゆる新聞」に目を通す。図版一の右隅にも見られるように、カフェの中で新聞は、この「細長き板ざれ」にはさまれて、店の壁に「掛け^{つら}ね」であるのが常であった。豊太郎はテーブルとこの新聞掛けの間を何往復もして、「活潑々たる政界の運動」や「文学美術に係る新現象の批評」などに目をとめ、記事にして日本の新聞社へ送るのである。

こうして、ドイツの新聞・雑誌に深く通じるようになった豊太郎は、かの国のジャーナリズムについて、次のような感想を抱くようになる。

我学問は荒みぬ。されど余は別に一種の見識を長じき。そをいかにといふに、凡そ民間学の流布したることは、歐洲諸国の間にて独逸に若くはなからん。幾百種の新聞雑誌に散見する議論には頗る高尚なるもの多きを、余は通信員となりし日より、かつて大学に繁く通ひし折、養ひ得たる一隻の眼孔もて、読みてはまた読み、写してはまた写す程に、今まで一筋の道のみ走りし知識は、自から綜括的になりて、同郷の留学生などの大かたは、夢にも知らぬ境地に到りぬ。彼等の仲間には独逸新聞の社説をだに善くはえ読まぬがあるに。

祖国日本で、瓦版に毛の生えた程度の新聞しか知らなかったであろう豊太郎を圧倒したのは、まず「幾百種」という圧倒的な新聞・雑誌の出版件数だった。ベルリンでは、普仏戦争後の七十年代以降、都市人口の爆発的な増加に合わせて、本格的にマス・メディアが成立し、さまざまな新聞・雑誌が乱立して、激しく競合するようになっていた。さらに豊太郎が感銘を受けるのは、そこに展開する「高尚な」議論である。ドイツの新聞は、その徹底した批判精神を身上としている。時には検閲にも抗い、各紙がそれぞれの信念のもとに自説を繰り広げる報道の姿勢は、豊太郎（そして鷗外）を啓発し、権威におもねらない「綜括的」な知見をもたらしたのであろう。

かつて、神聖ローマ帝国時代、ナポレオンによる占領、そして反動的なウィーン体制にいたるまで、ドイツのジャーナリズムは常に過酷な検閲に喘いでいた。この間、国家に批判的な記事や政治的な主張は厳しく禁じられ、新聞はせいぜい、官報や祝祭行事の予定、貴族や高官たちの動向等を報じるのみであった。ドイツ報道史において、停滞の時代ともいえるこの時期のわずかな収穫は、非政治的な文芸・経済欄そして広告が発達しただけだったのである。⁽¹⁷⁾

しかし、一八四八年、三月革命を境に事態は劇的な転換を見せる。騒動が収束してもなお、政治に対する一般の関心は冷めやらず、紙上においても自由で闊達な論議が求められるようになった。また、さらに決定的なことには、編集段階での事前検閲が撤廃されて、これまで当たり障りのない事実のみを報道していた各紙が、いまや独自の政治的信条のもとに、社説等で強く自己主張を始めたのである。こうした動向の中、前世紀以来の伝統を誇る「フォス新聞」に対して、保守系の「十字新聞」、リベラルな「国民新聞」など、この時期より次々とライバル紙が登場し始めた。そして戦勝と建国の七十年代、ベルリンでも新刊ラッッシュが相次ぎ、新首都を代表する「ベルリン日報」、出版王ウルシュタインの「ベルリン新聞」などが出て、さかんに自由主義的論陣を張るようになった。その徹底した政治的姿勢は、皇帝ヴィルヘルム一世と鉄血宰相ビスマルクが全盛の七十年代に、公に次のような主張をすることからも明らかである。

「ベルリン新聞」は立憲政府を望むものであり、決して皇帝絶対主義ではない。本紙は、ドイツ国民が自由であり、征服民のような扱いを受けないことを要求する。(一八七八年九月二十九日付)⁽¹⁸⁾



図版7 「新聞王」アウグスト・シェール

権威に屈しないこうした姿勢は、しばしば反体制的な論説となつて表れ、「ベルリン新聞」の主幹は、ビスマルクににらまれ、ほぼ常に罰金・逮捕を繰り返す状態だった。当局による弾圧があまりにも度重なるため、パリやウィーンなど国外に逃れて報道を続ける編集員もいたのである。しかし、自由と真実を求めてやまないこのような報道のあり方は、広くベルリン市民の支持を得て、この新興二大新聞は購読数を大きく伸ばしていった。

そうして迎えた八十年代、カフェ・パウアーの中で、メモを取りながら忙しく各紙に目を通す一人の男がいた。その名はアウグスト・シェール。彼はベルリンの書籍商の息子で、家を出た後にドイツ国内を転々とし、低俗本の出版やローラースケート場の経営など様々なことに手を染め、一財産を築いた。しかし、彼は女優の妻フローラのために、「フロラ劇場」を建てるという暴挙に出て失敗し、ほぼ全財産を使い果たしてしまふ。その後は、商業誌や移住者の情報誌、イラスト雑誌や日刊紙などを出版するがどれもうまくいかず、再浮上を目指してひたすらあがき続ける毎日を送っていた。⁽¹⁹⁾

パウアーで各紙を手に取りながらシェールが目論むのは、懲りもせずまた新聞を刊行す

ることであつた。しかし、彼が範を仰ごうとするのはドイツ紙ではなく、「ニューヨーク・ヘラルド」や「イヴニング・ポスト」などアメリカの新聞である。彼には従来のドイツの新聞が、堅苦しい主義主張や難解な教養に溢れ過ぎてるように思えたのである。それに対してアメリカの新聞は、簡潔かつ明快で、最新のニュースが盛り沢山で、何よりも記事がセンセーショナルであつた。同様の新聞をベルリンでも、というのがシェールの最後の賭けだつた。しかしこの計画には、米紙の編集に通じたエキスパートが不可欠である。懊悩するシェールに、カフェ・パウアーは運命的な出会いを用意する。シェールは、自分と同じようにいつもアメリカの新聞を読んでいる一人の常連客に気が付いていた。フーゴー・フォン・クプファーというその男は、多国語をあやつり、ロイター通信をはじめとする各国の報道機関の特派員を務めた実績があり、そして何よりも、アメリカで「ニューヨーク・ヘラルド」の編集長のもとで働き、ドイツに帰ってきたばかりであつた。

間もなく二人は意気投合し、クプファーはシェールとともに働くことを約束する。喜び勇んだシェールは、かけずり回って資金を集めた。そして一八八三年十一月三日、ついに「ベルリン・ローカル報知」アンツァイガー新聞が発刊されたのである。その新聞の「我々の目的と目標」には次のような箇所がある。

我々は本紙を編集するにあたって、あらゆる政治的な地位から距離を置き、ドイツそしてベルリンにおける最も重要な事件を読者に知らせ、文化や学問、商工業における衝撃的な展開、舞台や法廷、つまり、首都の生活全般において、我々の精神と心を惹きつけるすべての出来事に対して、開かれた目を持つことに努めよう！⁽²⁰⁾

ここで謳われているように、「ベルリン・ローカル報知」では、政治的な主張や論説は控えられ、重要な事実のみが簡潔で衝撃的な見出しとともに報道された。「すべての出来事に対して、開かれた目を持つ」という報道姿勢は、ポリシー無く、必要で身近なものは何でも記事にすることを意味している。実際、年々膨大な規模でベルリンに流れ込む新市民が求めていたのは、真摯で高邁な論説ではなく、日々変化する自分の周囲の「ローカル」な諸事情であり、すぐ役に立つ最新の情報だったのである。またその内容は、常に読者の興味と関心をかき立てるものでなくてはならず、主筆達は、大きな活字や目立つ段組、そして感嘆符の使用を惜しまなかつた。

こうした編集方針はたちまち評判を呼び、一ヶ月の購読料が十ペニヒという破格の値段も手伝って、「ベルリン・ローカル報知」は、社会のあらゆる階層に購読者を獲得していった。当初週刊だったこの新聞は、一八八四年から週三回、そして一八八五年八月一日には日刊となり、間もなく先のベルリン二大新聞を抜いてトップに躍り出る。そして、シェールがもたらしたアメリカ式の報道スタイルは、他の新聞・雑誌にも多大な影



図版8 カフェで新聞に読みふける市民たち

響を与えた。知識と教養を前提とする論説中心の従来の特権新聞は、知識階級にその購読層を限る傾向があった。しかし、これを機会に他の各紙も、程度の差こそあれ、より分かりやすく、より見やすく、より衝撃的に路線を変更し始める。すなわち、報道の対象を一般庶民にまで拡大し、大衆紙というジャンルが本格的に確立したのである。その結果、市民一人一人が、新聞・雑誌を介して積極的に情報を求めるようになった。八十年代は、ドイツにおいて、このようなジャーナリズム革命が起こった時代だったのである。

こうした動きが、鷗外のドイツ滞在とはほぼシンクロしていたことは、注目に値する事実である。「凡そ民間学の流布したることは、歐洲諸国の間にて独逸に若くはなからん」という先の太田豊太郎の印象は、ドイツの報道をめぐるこのような文脈の中で改めて理解されるべきだろう。前述のように、ベルリンでは場末の「休息所」ですら、諸新聞を自由に閲覧できたのである。こうした施設やカフェ、職場や駅、あるいは路上など、いたるところで紙面に向かう市民を目撃したであろう鷗外は、一般庶民にまで「流布」した先の情報革命を感じ取り、それを太田豊太郎に語らせたのである。この『舞姫』の主人公が新聞社の報道員になるということ、いや、鷗外自身が「ドイツ医事週報」の「通信員」になることを承諾したり、帰国後も『ベルリン日報』等の外国紙を購読し、『椋鳥通信』で西洋のニュースを精力的に紹介していたことを考えると、ジャーナリズムという新しい事象に寄せる鷗外の関心は、並々ならぬものがあつたといえるだろう。

鷗外の帰国から十二年後、児童文学者の巖谷小波が、ベルリン大学付属の東洋語学校に招聘されて、二年間教員として滞在する。彼はその記録を『小波 洋行土産』として著すが、その中で「伯林一の大新聞社」として、「ベルリン・ローカル報知」を紹介している。

ロカアル、アンツアイガアと云う新聞は、小新聞でこそあれ、得意は上中下三流に通じて、売れ高は凡そ二十五万部、まづは伯林第一の新聞である。余は大阪朝日新聞社の、村井法学士と一所に、一日これを参観したが、その規模の大なる事、設備の行届いた事は、実に羨ましいと云わざるを得ない。まづ印刷機械が二十二台。これも大方は新式の輪転機械で、二色刷、三色刷の出来るものもある。記者が凡そ六十人で。主筆は一人で二室を構て、部下の小記者に至るまで、その受持の部門によつて、一室二名乃至五名より多くは居らぬ。それでその記者が、何れも机の上に電話器を据えて、自在に遠近の用を便じるのだ。又職工はと云うと、男女合わせて千五百人。これが昼夜分

業で、この大きな建物の中に活動して居るのだから、以て新聞の勢力も知るべしではないか。⁽²¹⁾

この頃、シェールの会社は、購読数「二十五万部」を誇る「ローカル報知」の他に、日刊と週刊のイラスト新聞を発刊していた。一般の庶民向けに、図版や写真をふんだんに使用したその画報は、これまた大当たりとなっていたのである。それらの発刊にあたって、シェールが何よりも心血を注いだのは、最新のニュースをできるだけ迅速に伝えることであつた。そのため、「電話器」を導入して編集作業の能率を上げ、活字職工は「昼夜分業」で働き、「二十二台」もある輪転機は常に回り続けていた。時代を読むのに機敏な彼は、都市の生活速度が次第に上昇し、大衆がよりホットな情報を求めていること気がついていたのである。そしてこの高速化の波は、次章で述べるように、カフェ・バウアーにも押し寄せてきていた。

三

一八八七年四月、それまで滞在していた南ドイツのミュンヘンを離れ、ベルリンにやってきたときの印象を、鷗外は後日、次のように振り返っている。

伯林に往き着いて見ますと、風土も人情も、これまで居た MUENCHEN とは大分相違して居まして、殊に人情が南独逸の純朴なのに反して、余程鋭い、すばやいように感ぜられて、一時はほんやりしたやうな心持さへ致しました。⁽²²⁾

伝統と格式を重んじるバイエルンの古都から来た鷗外は、進取の氣勢に富むプロイセンの首都の威勢に翻弄されていたのである。世界都市へ向けて絶え間なく発展・拡大し続けるベルリンでの新生活は、鷹揚で質朴な南ドイツの気風に馴染んでいた鷗外にとって、抜け目がなく、慌ただしいものであつた。先の「新聞王」シェールは、そのようなベルリン市民の内面性を巧みにとらえて、自身のビジネス・チャンスとしたわけであるが、飲食業界においても、都市ベルリンの変化に乗じて、大成功を収めた伝説的な兄弟がいた。

南西ドイツの片田舎、オーバーデルディングゲン出身の、カールそしてアウグスト・アッシンガー兄弟は、立身出世を目指してベルリンへ赴き、コックや給仕をして働いていた。二人は、そうして貯めた小金と、兄の妻の持参金を元手にして、一八九二年、「ビア・クヴェレ（ビール泉）」と称する立食形式のビール・スタンドを開店する。それが後にベルリンを席卷するアッシンガー・レストラン・チェーンの始まりであつた。⁽²³⁾

すでに無数に存在する同種の店と、アッシンガーの「ビア・クヴェレ」が異なる点は、時間も金もない都会の労働者にターゲットを定め、素早く飲食ができて、しかも美味しく、そして何よりも安価であることだった。そこでは一杯十ペニヒでビールが飲めて、しかも幾種類もの銘柄が取り揃えてあった。具沢山のサンドイッチも十ペニヒで、この他やがて「ベーコン入りそら豆」が店の名物となった。しかし、とりわけアッシンガーを有名にさせたのは、ビールを注文すれば、丸パンが無料で付いてきて、しかもそれはお代わり自由というサーヴィスだった。この大盤振る舞いはセンセーションを呼び、アッシンガー・チェーンは瞬く間に店舗を増やし、六年後には二十五の「ビア・クヴェレ」が市内に展開するようになったのである。

その場所も重要であった。ライプチヒ通り、ポツダム通り、フリートリッヒ通り、オラーニエン通りや、アレクサンダー広場、ハツケ市場、ヴェルダー市場など、市内の交通の要所には、必ず青地に白いアッシンガーの目立つ看板があった。先に触れたように、アッシンガーの発展と都市のテンポ・アップとは切っても切れない関係がある。思えば開店の一八九二年という年は、ベルリンで初めて自動車の交通が許可された時期でもあった。⁽²⁴⁾ 鷗外滞在時より道路のアスファルト舗装は着々と進み、いよいよ帝都にガソリン・エンジンの音が響き渡り始めたのである。また同じ九十年代、これまで馬力に頼っていた市街鉄道が、一斉に電化され、街中に市電の網の目が張り巡らされた。こうした市内交通の変化の結果、アッシンガー・チェーンの前には、常に慌ただしく行き交う車両や市民の姿があったのである。

アッシンガーの成功の秘訣は、このような市民の生活スタイルに完全に密着した点にある。給仕達とのやりとりやチップなど、従来の飲食店の面倒な作法は、廃止あるいは徹底的に合理化され、来店した客はセルフサービスで食物を取り、ビールを注いで貰って、そのまま真っ直ぐに立食カウンターに向かった。急ぎの客なら、店に入って出るまでに二三分で事足りたのである。今で言うファスト・フードの先駆けであるが、食卓における伝統的なしきたりや作法を一切無視したこの新たな食のあり方は、當時きわめて斬新なものであった。原克は、アッシンガーがもたらしたこのような変化について、次のように洞察している。



図版 10 「ビア・クヴェレ」 1 号店



図版 9 兄カールと弟アウグスト・アッシンガー



図版 11 ベルリン市内の雑踏（1899 年）

給仕もおらず会話もない、テーブルでの礼儀も気配りもいらない。客同士あるいは店員とのあいだに、なんらの帰属意識も連帯感も要求されない。共同体的絆と呼べるものがない。ここにあるのは、すべて伝統的な食文化のコードから断絶してしまった、まったく新しい食の原理である。なによりも、迅速を旨とし、孤独をいとわず、明示的な共同性をもとめない、ただ食事という機能だけに目的をしばりこんだ文化装置、それがアッシンガー・チェーンという外食産業の存在論である。高速化した都市文明の高速化した食のかたちといえよう。⁽²⁵⁾

重要なのは、すばやく食事ができるということではなく、すばやく食事だけができるという点なのだ。つまり、そこに付随するものものの「食文化のコード」や「共同体的絆」をそぎ落としたところに、アッシンガー・チェーンの「まったく新しい食の原理」があった。そしてこのような作法（あるいは不作法）がもてはやされてしまうことに、ベルリンというモダン都市独特の内面性がある。先の引用で、鷗外が、ベルリンでは「殊に人情が南独逸の純朴なのに反して、余程鋭い、すばやいように感ぜられ」と述べたことが、あらためて思い返される。確かに、目つきの鋭い人々が足早に行き過ぎるこの場所には、食卓で「人情」を通わすゆとりも時間も存在しないのだった。

鷗外自身は、ベルリンに押し寄せるこうした趨勢を肌で感じてはいたものの、アッシンガーの流行を知らない。しかし、明治末期に留学した片山孤村は、（注15）に挙げたベルリン紹介において、次のように書き記している。

富豪貴族の出入する特殊料理店、ホテルの類もあれば、茶代も要らず、一片十文（五銭）で立食ひ摘食ひの出来る軽便廉価な店もある。この最後の種類の飲食店で名高いのはアッシンガー・麦酒泉（Aschingers Bierquellen）で、今では支店が全市に広がっている。食物（サン・ドイッチの類）飲物は一個又は一盃が十片（五銭）で自働仕掛で出来て来る。自働仕掛でない食物も至極廉価である。十数年前アッシンガーが始めて出来た時は非常な流行でアッシンガーで飲食するのはシック（灰殻）な事としてあつたが、今では下級の使用人を主な顧客としてゐる。併しアッシンガー株式会社近年の発展はすばらしいもので、かの『ライン・ゴルト』（Rheingold）の如き広大無辺の料理店は

亦同社の経営する所である。(傍点著者)

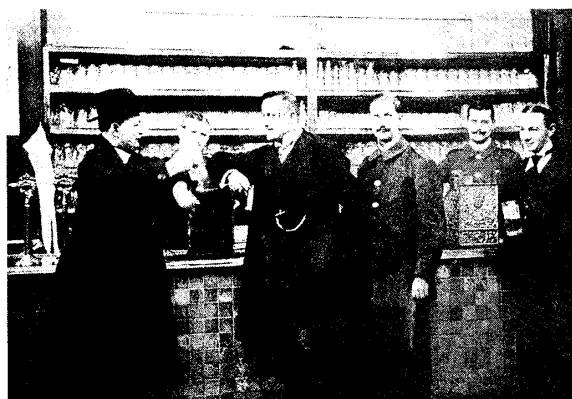
すでに一九〇〇年に上場し、「株式会社」となっていたアッシングガーは、この頃「ビア・クヴェレ」に留まらず、「ラインゴルト」などのレストラン・チェーンを展開させ、さらに原料のビール醸造、製パン、食肉加工をも自社で行い、ベルリンを代表する一大コンツェルンにのし上がっていた。しかし、「下級の使用人を主な顧客としてゐる」という孤村の言葉からも分かるように、その標準はあくまでも町を行き交う庶民に向けられていたのである。先の「ベルリン・ローカル報知」が、大衆紙として情報の民主化を果たしたとするならば、アッシングガーは、外食産業で同様の事を成し遂げたといえるだろう。いずれにせよ、大衆という新たな人間の単位が、都市に台頭してきた結果なのである。

孤村の記述においても一つ重要な点がある。それは飲食物が「自動仕掛で出来て来る」ということだ。開店当初よりも食の高速化はますます進み、いまや飲食物は、自動販売機で購入することが可能になっていたのである。(ただし、併設して従来の「自動仕掛でない食物も」あった。)このスタイルには実は先例があつて、それが一九〇四年にベルリンでオープンしていた「アウトマート」である。そのドイツ

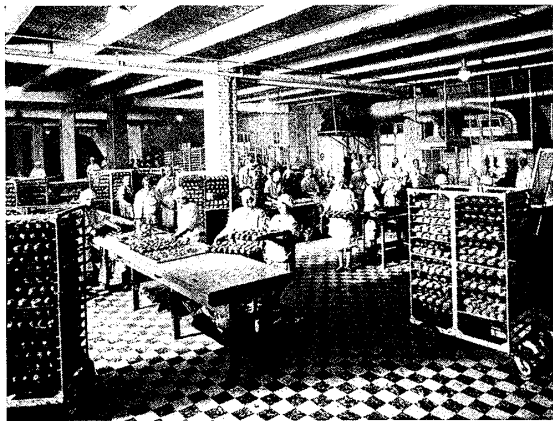
語が意味するように、まさにそれは自動販売機アウトマートのみによるレストラン

なのだ。そこにはもはや給仕も料理人もいない。客はコインを機械に投入し、ボタンを押して、あとは黙々と飲食するだけだ。この「アウトマート」チェーンのモットーは、「素早く、気楽で、チップなし」である。ここでは先のアッシングガー以上に、食に付随するあらゆる余分な要素が切り捨てられ、いまや「チップ」を渡す人間すら存在しないのだった。高速化した食は究極の形態へと行き着いたのである。

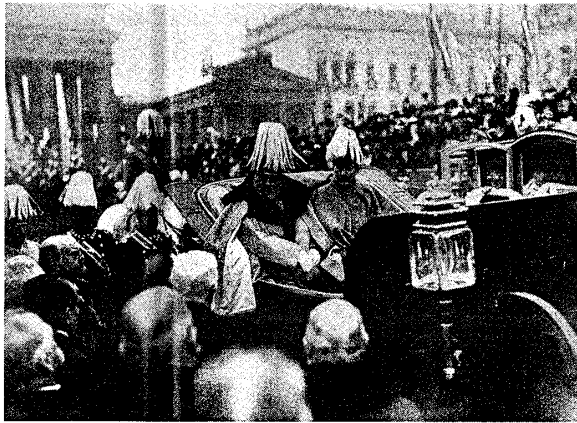
ちなみに、上田敏は、一九〇八年にベルリンを訪れた際、この「アウトマート」に立ち寄っている。妻に宛てた書簡を引用してみよう。



図版 12 「ビア・クヴェレ」店内のカウンター



図版 13 自家製造によるパンとソーセージ



図版 14 ウンター・デン・リンデンを行くヴィルヘルム二世 (右)

拝啓けふ絵葉書をだしましたが丁度これと同時につきませう、一体けふライブチヒへ日がへりで行くつもりでしたがやめにしてまた市中の見物をいたし、第一に蠟人形へゆきました、これは水晶宮や各国帝王人物像などの生人形で全く田舎ものだまし、次に町を通つて「アウトマート」(自動飲食堂)へはいりました、五銭の白銅を投りこむとビールや葡萄酒が出たり、又菓子やサンドキツチ其他の出る趣向でおもしろいものです、これよりウンテル・デン・リンデンの有名なカフェに飛びこみ、宏壮な建築のなかのぐらす窓より往来をながめながらビールののみました、これは伯林の名物でカフェ・パウアーといふ所です、大西洋の船中より人にす、められた所です、明日もまた市中見物のつもり。⁽²⁶⁾

後発の国日本から来た上田敏は、どの程度これまで論じた食の変容を理解していただろうか。彼にとっては、自動販売機そのものがめずらしく、「白銅を投りこむと」物が出てくるそのしくみが「おもしろい」と感ぜられただけかもしれない。しかし、「アウトマート」の後に、彼が「カフェ・パウアー」を訪れたということは、興味深い事実である。というのも、いまやベルリンの飲食店において、この二つは最も著しい対照を成していたからである。クラシックなウィーンの伝統を受け継ぐ「宏壮な建築」、くつろぎながら往来を眺めることのできる「ぐらす窓」、一杯の「ビール」や珈琲を前にして流れる贅沢な時間——上田敏にとって、こうした「カフェ・パウアー」における憩いは、先の「アウトマート」で体験した最先端の飲食行為の、いわば代償となっている。彼はかねてより「伯林の名物」としてこの喫茶店を薦められていた。前述のように、かつて鷗外が訪れた時代、パウアーは脈動する帝都の息吹をそのまま感じ取れる場であった。しかし、この頃すでにカフェ・パウアーは、古き良き十九世紀を偲ばせる遺物として、旅行者の「名物」になっていたのである。

この前日、上田敏は、眼前の「ウンテル・デン・リンデン」を逍遙していた。そのとき彼は、大通りを歩く大勢の市民が立ち止まりはじめたのに気付く。視線を追って道の中央を見れば、丁度「オオトモビル」に乗った皇帝ヴィルヘルム二世が、帽子を振る民衆の歓声に応えながら行き過ぎるところだった。この姿がよほど印象的だったに違いない。上田敏は、早速、自動車に乗った皇帝の絵葉書を買求め、「カイゼルもアウトぐるまの浮世かな」と詠んで妻に書き送っている。かつて、ヴィルヘルム一世の御代に

は、皇帝は大勢の近衛兵を引き連れて、メインストリートを威風堂々と騎行したものだ。また、『舞姫』に「維廉一世の街に臨める窓」と記されているように、この大通りに面した宮殿の窓からは、決まって正午になると、行進する兵たちを見下ろすカイザーの姿が見られた。上田敏の脳裡にも、「ウンテル・デン・リンデン」の路上に展開するこのような祝祭的なイメージが、まるで静止画像のように焼き付いていたに違いない。しかし、自動車で眼前を通り過ぎる現皇帝の姿は、もはやそうした旧世界の揺るぎない秩序と權威を伝えるものではなかった。都市の近代化そして高速化の波は、市民たちを呑み込み、すでに体制の頂点であるカイザーにも及びつつあったのである。

結び

カフェ・パウアーの経営者、M・パウアーは、七十〜八十年代における店の栄華を見届けた後、一八九四年一月十九日にこの世を去った。折しも店の前を自動車が行き始め、アッシンガーの立ち食いチェーンが爆発的に店舗を増やしている時期であった。事業は妻のテレゼに引き継がれ、夫以上に有能なこの女主人によって、カフェはまだその命脈を保つ。しかし、すでに時流は古色を帯びたウンテル・デン・リンデンを離れ、人や文化は西へ西へと移動していった。ベルリン西区にあるクーダム通りが次第に賑わい始めたのもこの頃である。その通り沿いに、あたかもM・パウアーの死と入れ替わるように、新しいカフェが開店する。その名は「西区カフェ」^{カフエツェス・ヴエスツェン}という。主な顧客はベルリンに流入してきたボヘミアンたちであり、とりわけ多くの新進芸術家が集まって評判を呼んだ。作家や画家、役者や思想家が終日たむろし、後に彼らの中より、ダダイズムや表現主義などドイツの前衛運動は花開くことになる。そのような客の精神性を反映して、俗に「誇大妄想狂カフェ」^{カフエグレイゼン・バーン}として名を馳せたこの店は、まさにモダン都市ベルリンを代表する文化スポットに他ならなかった。⁽²⁷⁾ ちなみに鷗外は、帰国後もベルリンのカフェ事情に通じており、この「誇大妄想珈琲店」を「文士や美術家の集合所」として紹介している。⁽²⁸⁾ カイザーが君臨し、武勲の栄光に満ちていた帝国の都は確実に変わりつつあった。

テレゼ・パウアーは、夫のカフェを守り続け、一九〇七年七月十一日に惜しまれながら死去する。その後、店は二人の息子の手に渡るが、パウアー家と店の繋がりは徐々に解消しつつあった。その三年後の一九一〇年、鷗外は『棕鳥通信』にて、「伯林のCafé BauerをKonrad Uhlといふものに売って、パウエル一家は退隠する」旨を報告している。⁽²⁹⁾ それを書きつづる際、どのような思いが鷗外の脳裡を去来したであろう



図版 15 芸術家のたまり場「西区カフェ」

か。同記事によれば、「但しカツフェエ、バウエルの名は保存する」ということだが、いま確かにひとつの時代が終わったことを、最盛期のカフェ・バウアーを知る鷗外は感じていたのではないだろうか。実際その時期、徐々にドイツ帝国は終焉に向かい始めていた。国民から敬愛されたヴィルヘルム一世や名宰相ビスマルクはとうに亡く、鷗外が「dämonisch（悪魔的）」と形容した皇帝ヴィルヘルム二世は、無思慮なまでに力業一辺倒であり、その強引な対外政策によって国際的孤立を招きつつあった。その結果、やがてドイツは第一次世界大戦の泥沼へと突き進み、敗戦後、帝国は瓦解することになる。カフェ・バウアーはカイザー無きベルリンにもはやその場所を見出せなかったに違いない。一九二五年にひっそりと名前を「カフェ・ウンター・デン・リンデン」に変え、半世紀近くに及ぶその歴史に幕を閉じたのだった。

*本稿は、平成十七年～十九年度科学研究費（若手研究B・課題番号一七七二〇〇七二）の補助を受けて成立した研究の一部である。

注

(1) カフェ・バウアーに関する詳細は、Renate Petras: *Das Café Bauer in Berlin*. Verlag für Bauwesen. Berlin 1994. に多くを負っている。

(2) カフェ・ハウスの概論については、主に、Rauers Friedrich: *Kultugeschichte der Gaststätte*. Teil 2. Alfred Metzner Verlag. Berlin 1941. お

よび、Ulla Heise: *Kaffee und Kaffeehaus*. Komet Verlag. Köln 1997. や、ヴォルフガング・ユンガー（小川悟 訳）『カフェハウスの文化史』関西大学出版部（平成三年）、を参照した。

(3) 『舞姫』のテキストは、『森鷗外全集1』ちくま文庫（二〇〇〇年）に拠った。なお、引用の際、ふりがなを省略した箇所がある。また、鷗外が描写するベルリンの人物像が、決して恣意的な選択でないことは、前田愛『都市空間のなかの文学』ちくま学芸文庫（一九九四年）においても指摘されている。

(4) Baedeker's *Berlin und Umgebungen*. 6. Aufl. 1889, S.20.

(5) 『独逸日記』からの引用は、『森鷗外全集13』ちくま文庫（一九九六年）に拠る。

(6) ヴェルナーの伝記的事実に関しては、Dominik Bartmann: *Anton von Werner*. Deutscher Verlag für Kunstwissenschaft. Berlin 1985. が参考になった。

(7) この経緯については、（注1）に挙げた *Das Café Bauer in Berlin*. の他に、ヴェルナーの自伝 *Erlebnisse und Eindrücke 1870-1890*. Ernst

Siegrfried Mittler und Sohn. Berlin 1913. を参照した。

前掲書一九三頁

留学時代の鷗外の読書に関しては、いまなお参考となる次の実証的研究を挙げておく。寺内ちよ「ドイツ時代の鷗外の読書調査——資料研究——」〔東大比較文学会編集『比較文学研究』第六号（一九五七年二月）所収〕

イタリアをめぐる鷗外、ゲーテ、アンデルセンの関係は、森まゆみ『「即興詩人」のイタリア』講談社（二〇〇三年）から多くの示唆を受けた。

森鷗外訳「即興詩人」『鷗外全集 第二巻』岩波書店（昭和四十六年）三九八頁。なお、引用の際に旧漢字は現代風に改めた。

大畑末吉訳『即興詩人（下）』岩波文庫（昭和四十二年）二十四～二十五頁

Anton von Werner. (注6) 二六六～二七七頁

Das Café Bauer in Berlin. (注1) 五十二頁

片山孤村『都会文明乃画図 柏林』博文館（大正二年）一四五頁。ただし、旧漢字を現代風に改めてある。

森鷗外とベルリンのカフェに関しては、次の先駆的研究がある。真杉秀樹『森鷗外と「珈琲店」——ベルリン・カフェ文化史からの照明——』〔森鷗外論集 出会いの衝撃』新典社（二〇〇一年）所収〕真杉はこの論文において、ベルリンのカフェが「新聞という情報メディアの集積所」であることをすでに指摘している。

ベルリンおよびドイツの報道の歴史については、Peter de Mendelssohn: *Zeitungstadt Berlin*. Ullstein. Berlin 1959. に多くを拠っている。前掲書七十六頁

アウグスト・シェールという人物については、多少小説的な脚色が施してあるが、次の伝記が参考になった。Hans Erman: *August Scherl. Dämonie und Erfolg in wilhelminischer Zeit*. Universitas Verlag. Berlin 1954.

Zeitungstadt Berlin. (注17) 八十七頁

巖谷小波『洋行土産 上巻』博文館（明治三十六年）三五一～三五二頁。なお、引用の際に、旧漢字を改め、ふりがなを省略した。

「衛生談義」『鷗外全集 三十四巻』岩波書店（昭和四十九年）二四九頁。ただし、旧漢字は現代風に改めた。

アッシンガー兄弟に関しては、次の伝記に拠るところが大きい。Karl-Heinz Glaser: *Aschingers "Bierquellen" erobern Berlin*. Verlag Regionalkultur. Heidelberg-Ubstadt-Weimer-Basel 2004.

- (24) Ingo Materna / Wolfgang Ribbe: *Geschichte in Daten Berlin. Koehler u. Amelang*. 1997, S.150.
- (25) 原克『モノの都市論 ―二〇世紀をつくったテクノロジーの文化誌』大修館書店(二〇〇〇年) 八十七頁。なお、アッシンガー・チェーンと後述の「アウトマート」に関しては、多くをこの研究に依拠しており、本論はこれを敷衍するかたちで考察が進められている。
- (26) 『定本上田敏全集 第十巻』教育出版センター(昭和五十六年) 三六九―三七〇頁。なお、引用の際、旧漢字は改めてある。
- (27) 「誇大妄想狂カフェ」をはじめとする、ベルリンに出現した新しい芸術家カフェについては、ユルゲン・シェベラ(和泉雅人・矢野久 訳)『ベルリンのカフェ ―黄金の一九二〇年代』大修館書店(二〇〇〇年)が詳しい。
- (28) 「棕鳥通信」『鷗外全集 二十七巻』岩波書店(昭和四十九年) 八三七頁。ただし、旧漢字は現代風に改めた。さらに付け加えれば、鷗外に
よるこの記事を読んだ小泉信三は、後日、欧州留学の折に「東京のプラントンにも比すべき」この喫茶店を訪れている。『青年小泉信三の
日記』慶應義塾大学出版会(二〇〇一年) 四五―一頁。
- (29) 「棕鳥通信」前掲書一九五頁

図版出典

- (図版 1) Die Gartenlaube. Nr. 50 1888.
- (図版 2) Renate Petras: *Das Café Bauer in Berlin*. Verlag für Bauwesen. Berlin 1994, S.36.
- (図版 3) Dominik Bartmann: *Anton von Werner*. Deutscher Verlag für Kunstwissenschaft. Berlin 1985, S.98-99.
- (図版 4) 前掲書六十九頁
- (図版 5) Renate Petras: *Das Café Bauer in Berlin*. Verlag für Bauwesen. Berlin 1994, S.43-45.
- (図版 6) 前掲書五十四頁
- (図版 7) Peter de Mendelssohn: *Zeitungsstadt Berlin*. Ullstein. Berlin 1959.
- (図版 8) Die Gartenlaube. Nr.13 1887.
- (図版 9) Karl-Heinz Glaser: *Aschingers "Bierquellen" erobern Berlin*. Verlag Regionalkultur. Heidelberg-Ubstadt-Weihen-Basel 2004, S.30-31.
- (図版 10) 前掲書二十九頁
- (図版 11) Friedrich Terveen(Hg.): *Berlin in Photographien des 19. Jahrhunderts*. Rembrandt Verlag. Berlin 2. Aufl. 1971, S.20-21.

- (図版12) Karl-Heinz Glaser: Aschingers “Bierquellen” erobern Berlin. Verlag Regionalkultur. Heidelberg-Ubstadt-Weiter-Basel 2004, S.40.
- (図版13) 前掲書七十一～七十二頁
- (図版14) Julius H. Schoeps: Berlin. Geschichte einer Stadt. Be. Bra Verlag. Berlin 2001, S.116-117.
- (図版15) 『ベルリンのカフェ』(注27) 十八頁